ドルノド県調査報告

二 木 博 史

昨年（2015年）は中国の内モンゴル自治区フルンボイル市でバルガ人からききとり調査をし、それについて本誌の前号で紀行文のかたちで紹介したが[1]、ことしはモンゴルのドルノド県でバルガ系の住民について簡単な調査をしたので、記録しておくことにする。

モンゴルでは1990年代まで身分証明書にヤスタン（*yastan*）とよばれる、エスニック・グループ（あるいはサブエスニック・グループ）のなまえが記載された。民主化後は、姓（*obog*）がより重視され、ヤスタンのかわりに記載されるようになった。

それでも10年に1回おこなわれるモンゴルの人口調査（日本の国勢調査に該当）では、ヤスタンを回答することになっており、2010年の調査の報告では、人口100名以上のヤスタンが24あげられている。いちばんおおいのはもちろんハルハ（2,168,141名、82.4パーセント）で、つぎがカザフ（101,526名、3.86パーセント）の順番である（ただし、10万人以上に達する、でかせぎ労働者や留学生などの海外在住者はこの調査には反映されない）。バルガ（*Barga*, 2,989名）は、16番めにでてくる[2]。

ドゥルブドなど西モンゴルのオイラト系のサブエスニック・グループの名称（全部で7集団）はさまざまな場で目にしたり、耳にしたりするので、おなじみだが、エルジゲン（*Eljgen*, 1,340名）、サルトール（*Sartuul*, 1,286名）がはいっているのをみると、かれらもヤスタンに分類されているのかと意外におもうかもしれない。内モンゴル系のヤスタンには、ウゼムチン（*Üzemchin*, 2,577名）、ハラチン（*Kharchin*, 152名）、ツァハル（*Tsakhar*, 132名）がある。内モンゴルの住民についてかたるときは、ウゼムチンはふつうウジュムチンとかかれ、ツァハルはたいていチャハルと表記される。

おなじヤスタンに属するひとは、一定の、場合によってはかなりつよい帰属意識をもっていることがすくなくない。ただ最近は、父親と母親のヤスタンがことなることもおおく、モンゴル社会におけるヤスタンの役割を過大評価するのは危険であろう。

なお中国の場合、人口調査では56の民族名のいずれかを回答することになっている。この56の民族のひとつであるモンゴル人はさらに、オルドス、ホルチン、バルガ、ウジュムチンといったサブエスニック・グループに分類されるが、かれらの数についての公式の調

---

[1] 二木博史「フルンボイル調査報告」『日本とモンゴル』132号（2016年3月）。

[2] Mongol Ulsiin Ündesnii Statistikiin Khoroo, *Khün am, oron suutsnii 2010 onii ulsiin toollogo: negdsen dün*, Ulaanbaatar: BCI, 2011, p.54. これらのデータはネット上でも公開されている。

査はおこなわれてないので、正確な数字は存在しない。中国のモンゴル人の場合も、サブエスニック・グループへの帰属意識は相当につよいことがある。かれらはこのようなサブグループをしばしば日本語で「部族」と説明するが、部族のような排他的で自治的な社会組織はいまの中国にはもちろん存在しないし、清代のモンゴル人社会の説明にも「部族」という用語は適切ではない。

中国と関係のあるヤスタンのうち、ハラチンはべつとして、ツァハルとバルガとウゼムチンについては、ほぼ全員20世紀に移住してきたひとびと、あるいはその子孫とかんがえていいとおもわれる。この場合のツァハルは1912年にソミヤー・ベイセとともに新疆からやってきたチャハルを、ウゼムチンは大部分、第二次世界大戦の終結後、1945年のあきに内モンゴルのシリーンゴル盟からモンゴルに移住したひとびとをさす。他方フルンボイルのバルガ人の移住はモンゴル王国成立後の1912年にはじまり、1916-1917年、1928年、1945年にまとまった数の住民がうつってきたので、その越境のプロセスはずっと複雑で、かつ興味ぶかい。

中国から移住したバルガとウゼムチンは、ロシアからうつってきたブリヤートと同様、もともと外モンゴルとさかいを接している地域に居住していたので、そのときどきの政治的、社会的混乱のなかで国境をこえるのは、ある意味、容易であったが、1920年代すえに極左政権が成立して以降、とくに1932年に日本が満洲国をつくってからは、国家としての基盤がよわかったモンゴル政府は、しばしばかれら移住民を迫害、差別した。代表的な事例は1937年にはじまった大粛清である。独裁者チョイバルサン首相は、同年10月の演説のなかで、ブリヤート、バルガなどの集団に対する不信感を露骨に表明している。

民主化以前、バルガ系のひとがその出自をかくす場合がすくなくなかったのは、フルンボイルは中国に属するので、中ソ対立の影響もあり、ながいあいだ関係のわるかった中国からの移民、あるいはその子孫だということをおおっぴらにいうのは、はばかられたためではないかとおもわれる。

わたしの周辺にもバルガ人がいたことをしったのは、最近のことだ。ひとりは、東京外国語大の客員教授もつとめた文学研究、とくにD.ナツァグドルジ研究の第一人者、故L.バルダン（L.Baldan）教授である。バルダン先生は、自分がバルガだということを、民主化後にカミングアウトしたそうだ。

もうひとりは、モンゴル国立大学で歴史をおしえていた、やはり故人のE. チメドツェレン（E.Chimedtseren）先生である。わたしは、モンゴル女性史の研究書をだしているチメドツェレン先生のモンゴル史の講義を、1970年代後半にきいている。すばらしい記憶力のもちぬしで、まったくノートをみずに、つぎからつぎに板書していたことをおもいだす。当時の社会科学学部の学部長だったR.サンジャースレン先生（民主化運動の重要な指導者ゾ

リグの父親で、ブリヤート）と同様、中国留学ぐみだった。チメドツェレン先生がバルガだったことは、ミャグマルサンボーさんのかいた本ではじめてしった。念のために、当時いっしょに授業をうけていた、いまはモンゴル国立大で歴史をおしえている友人に確認したら、チメドツェレンさんがバルガだとは、ながいあいだしらなかったそうだ。

バルガ系の住民が集中している地域としては、ドルノド県のフルンボイル郡が有名だが、同県のゴルバンザガル郡にもまとまった数のバルガ人がすむ。2010年の時点では、バルガ人の66.5パーセントがドルノド県にすんでいた[3]。また、かつてはトゥブ県のアブダルバヤン郡にもバルガ人のコミュニティがあった。うえのチメドツェレンさんはゴルバンザガル郡、バルダン先生はアブダルバヤン郡[4]の出身である。

今回、調査の対象としてえらんだのは、ドルノド県のゴルバンザガル郡である。同郡は、1916年にバルガ出身の伝説的英雄マンライバータル・ダムディンスレン（1871-1921）[5]にあたえられたホショー（行政単位）に起源を有する。現在進行中の科学研究費プロジェクトのひとつの目的は、モンゴル系集団の越境の理由、移住さきでのうけいれられ方、時間の経過にともなうアイデンティティの変化をあきらかにすることである。ゴルバンザガル郡にすむバルガ系住民は、約100年まえに移住してきたひとびとにルーツを有するので、これらのテーマを研究する場合の事例としてふさわしいと判断した。

8月の国際モンゴル学会のときに、モンゴルのバルガ研究の第一人者G.ミャグマルサンボーさん（科学アカデミー歴史学考古学研究所）に同郡での調査を予定していることをつたえ、協力をもとめた。軍事史から出発したミャグマルサンボーさんは、ハタンバータル・マグサルジャブやマンライバータル・ダムディンスレンの研究書などを刊行し、いまやモンゴル現代史の代表的研究者としてたかい評価をうけている。バルガ研究では『バルガ解放闘争―移動と定着』という基本的な研究書を2007年に刊行している。わたしが利用しているのは、2011年にバルガ叢書（*Barga tovchoon*）の第5冊として刊行された第2版である[6]。

---

[3] *Ibid*, p.73.

[4] バルダンさんは、アブダルバヤン郡のバルガ人についての文集であるD.Gongor, *Avdarbayanii barguud*（Ulaanbaatar, 2004）を監修し、同書のなかに自分の父親、母親のモンゴルへの移住、かれらのモンゴルでの生活についての文章も掲載している。この本はフルンボイルでも注目され、2009年にハイラルの内モンゴル文化出版社からモンゴル文字版もでている。

[5] 日本でマンライバータル・ダムディンスレンの生涯について最初に紹介したのは、田中克彦『草原の革命家たち　モンゴル独立への道』（中公新書、1973年）であろう。なお同氏がおもにつかったのは、1946年刊のSh.ナツァグドルジ著のマンライバータル・ダムディンスレン伝だが、この伝記は愛国主義の高揚のためにかかれたという面があり、脚色された部分もすくなくなく、引用には注意を要する。

[6] T.G.Myagmarsambuu, *Bargiin erkh chölöönii temtsel: nüüdel, suudal*, 2nd ed., Ulaanbaatar: Soyombo printing, 2011.

おそらくはバルガ出身の軍人・外交官マンライバータル・ダムディンスレンについて研究する過程でバルガ人の歴史全体に関心をもつようになったのだと想像する。

ミャグマルサンボー氏は数日後に、バルガ協会のJ.ゴンボさんにひきあわせてくれた。このときは握手をしただけで、学会のあとでゆっくりあいましょう、ということになった。8月18日（木）に国際モンゴル学会の閉会式があり、翌19日にはトーショー・ホテルでメルゲン・ゴンボジャブ研究会議が開催された。メルゲン・ゴンボジャブは1920年代にフランスで高名な東洋学者ペリオの研究協力者をつとめ、1930年代にはレニングラードで学位論文を執筆した学者で、もし粛清されていなければ、B.リンチェンやTs.ダムディンスレンに匹敵する業績をのこしただろうとかんがえられている重要な学者である。たいへんよく準備、組織された会議で、中心になったヒシグト教授（オラーンバータル大学、科学アカデミー歴史学考古学研究所兼務）の貢献がおおきい。

午後5時にゴンボさんとあう約束をしていたので、やむをえず、このメルゲン・ゴンボジャブ研究会議を途中でぬけだし、同氏の自宅にむかった。音楽学校とインド大使館のあいだの道路を北にむかうと、みぎがわにノミン・デルグールという商業施設があらわれる。ゴンボ氏のお宅はそこからさらに北にすこしさきのビルのなかにある。第11地区の東がわの見当だ。

ゴンボ氏のもともとの専門は土木技師だが、いまは退職して、バルガ研究に熱中していて来客もおおい。この日も午前中にケンブリッジ大学のボラグ（Bulag）さんが訪問したそうだ。

モンゴルでのバルガ協会（*Barga sudlaliin kholboo*）の創立のはなしをきく。2006年に設立され、会長はナムスライ。うえでも引用したように、2010年の人口調査ではバルガと回答したひとは約3,000人だが、本当はバルガでもそれをかくしている場合もあり、実際はもうすこしおおい可能性もあるということだ。2007年からバルガジン・ナーダムという国境をこえたバルガ人の祭典がはじまった。最初はドルノド県のフルンボイル郡、2011年はゴルバンザガル郡、去年（2015年）は、ロシアのブリヤート共和国のバルグジンでもよおした。今後は3年に1回おこなう予定で2018年にはチョイバルサン市で開催し、2021年にはマンライバータル・ダムディンスレン生誕150周年にあわせて実施すると、具体的な計画をかたってくれた

ゴンボさんがバルガ研究に熱中しているのは、母方の祖父がバルガ出身だからだ。1918年うまれの母親ラムジャブ（Lhamjav）は新バルガ右旗のアドーンチョローン・ソムの出身だそうだ。ハランホド（*Qarangqud*）氏の系図にラマジ・ザンギのなまえが記録されていて、このラマジの子がセンゲで、ラムジャブの父親になる。センゲもザンギだったから、代々ソム長をつとめたことがわかる。

マンライバータル・ダムディンスレンは領土（ホショー）をあたえられたあと、一度フルンボイルの故郷にもどり親せきをモンゴルに移住させたが、そのときにセンゲもモンゴルにうつりすんだらしい。

ゴンボ氏はバルガ関係の文献資料をかなりあつめていて、書棚のかなりの部分がそれらでうまっている。モンゴル出版のバルガ関係の本を4冊いただき、中国のフルンボイルで刊行された新バルガ右旗関係の1冊は代金をはらった。フルンボイルからモンゴルに亡命したバルガ人J.ウルズィーさんの話題もでた。はやい時期からモンゴルの諜報機関と関係があったという解釈をきいた。高齢のウルズィーさんに歴史学博士の学位を授与するのに貢献したのは、ゴンボ、ミャグマルサンボーのふたりであることがわかった。ウルズィーさんの学位論文を本にした『バルガ・モンゴル人の歴史』[7]は、中国でモンゴル文字版も出版されている。

ゴルバンザガル郡の歴史で一番気になっていたのは、最初マンライバータル・ダムディンスレンにあたえられた領地と現在のゴルバンザガル郡の領域がかさならないことだ。なぜなら、本来のマンライバータル・ダムディンスレンのホショーは、いまの行政単位ではドルノド県チョローンホロート郡とダシバルバル郡の一部をあわせた地域になるからだ[8]。

1911年に独立したモンゴル王国に域外から参加し、モンゴル軍の作戦などに従事して顕著な功績があったモンゴル人のうち、1915年のキャフタ協定後もモンゴルにとどまったものには領地があたえられた。当時は清代の制度をうけつぎ、特定の領主が領民を支配するホショー（旗）が社会の核になっていたので、恩賞はあらたにホショーをつくるという形式をとったのだ。旧来の領主たちとのあいだに紛争が生じないよう、あらたなホショーは、ロシアとの国境ぞいにもうけられていた広大な哨所（*kharuul*）地帯につくられた。それらはとくにセツェン・ハン・アイマグに集中し、バルガ出身のマンライバータル・ダムディンスレン郡王、ポンツァグラブダン・ベイレの両名、シリーンゴル盟ホーチド左旗のセルネントジル親王、ジョーオダ盟ヒシグテン旗のロルゴルジャブ公の計4名とその属民のためにホショーが設置された[9]。

最初ロシアと国境を接する地域につくられたマンライバータル・ダムディンスレン旗は、ある時期にいまのゴルバンザガル郡に移動したのだとおもわれる。これについてゴンボさんにきくと、バルガ人を信用していなかったので、国境地域からうつしたのだろうという解釈だった。このことは、現地調査でたしかめる必要がある。

---

[7] 第3版は、Kh. J. Ölzii, *Barga Mongoliin tüükh*, Ulaanbaatar, 2015.

[8] 地図はT.G.Myagmarsambuu, 2011, p.80参照。

[9] 1915年のキャフタ協定のあとに設置されたこれらのホショーついては橘誠『ボグド・ハーン政権の研究　モンゴル建国史序説　1911-1921』（風間書房、2011年）の第13章を参照。

ゴンボさんはすでにゴルバンザガル郡の郡長ドルジバータル氏にわたしが調査にいくことをつたえてあるというので、ひと安心した。郡長の電話番号をメモした。

実際にドルノド県へ出発したのは8月25日（木）である。同行をたのんだR.オトゴンバータル氏（科学アカデミー言語文学研究所）がブリヤートのウランウデの学会からもどるのをまったからである。同氏は、国際モンゴル学会の初日にエルベグドルジ大統領から赤旗勲章を授与されている。長年の文献学研究、とくに木版本の研究への貢献が評価された。この赤旗勲章というのは、内外の研究者によくあたえられる北極星勲章よりもひとつ格がうえの勲章で、今回の受賞者はオトゴンバータル氏ひとりだけだった。同氏の共同研究者のアンナ・ツェンディーナさん（ロシア人文大学教授）も同行した。国民的作家、アカデミー会員、故Ts.ダムディンスレンのお嬢さんである。3年まえにヘルレン河流域でオボーの調査をしたときにも、やはりこのふたりといっしょに行動した。このときのことも本誌にかいたことがある（第127号）。運転手は前回とはちがうが、車はおなじアメリカ製のレクサス（LX 470）であった。

あさの7時半にオラーンバータルを出発して、午後6時半にドルノド県の中心都市チョイバルサンに到着した。途中、ヘンティー県のウンドゥルハーン（最近チンギス市となまえがかわった）までは基本的に舗装されているが、一部、道路にあなのあいた、すこし危険な地帯がある。ウンドゥルハーンからチョイバルサンまでは、なん箇所かは道路が舗装工事中で、わきの未舗装のみちをとおったが、大部分はすでに舗装されている。ふるいみちはヘルレン河の北をとおっているが、新道は南をとおる。したがってフルンボイル郡を通過するし、一部ではスフバータル県もとおる。

フルンボイル郡の中心から40キロぐらいさきにトギーン・オールというひくいやまがあり、その斜面にむかしの寺院のあとがのこる（写真参照）。ここではかつてふるい旗がまつられていて、なまえもトギーン・スムであった。この場合の旗（*tug*）は、くにや共同体を守護するつよい霊のやどっている特別な旗で、寺院自体、通常の仏教寺院とはことなる性格を有した[10]。19世紀のなかばに有名なトグトホトゥル王のイニシャチブでたてられた。この寺院あとに特につよい関心をしめすオトゴンバータル氏によれば、もとあった黒旗はいま、オラーンバータルの歴史博物館に所蔵されているそうだ。ここからは、ヘルレン河をへだてて、対岸にヘルレン・バルス・ホトの仏塔がのぞめる。ヘルレン・バルス・ホトの現状については、あとでのべる。

[10] この寺院の解説と、地元の3名による同寺院についてのかたりは以下のサイトを参照。
http://www.mongoliantemples.org/index.php/mn/

トギーン・スム

チンギスの防壁の説明

チョイバルサンのヘルレン・ホテルにチェックインした。わたしはチョイバルサンは2度めで、前回は2009年にきたから7年ぶりである。前回はハルハ河戦争シンポジウムのあと、田中克彦先生やフスレさんたちといっしょに、オラーンバータルから飛行機できた。このときは、本当はさらにハルハ河のちかくまでいきたかったのだが、日程の関係でかなわず､そのかわりにバルガ人のおおいフルンボイル郡へいって簡単なききとり調査をした。

夕食のあと、散歩していたらTs.ダムディンスレン記念県立図書館のまえにでた。たてもののまえにはダムディンスレン像がたてられている。同行のツェンディーナさんの父親Ts.ダムディンスレンはドルノド県のマタド郡出身なので、ドルノドでは特別なあつかいをうけている。

8月26日（金）。前日にゴルバンザガル郡の郡長に電話してあったので、あさの早い時間に出発し車でゴルバンザガルにむかう。途中アイルも家畜もほとんど目にはいらない。井戸は、ふたつほどみかけた。どうやら家畜ののめる水がすくないようだ。チョイバルサンから126キロの距離にあるゴルバンザガル郡の中心にはいるすこしてまえに､「チンギスの防壁」（*Chingisiin kherem*）をしめす標識がある（写真参照）。ヘンティー県のバヤンアドラガ郡から中国領に達する全長500~600キロメートルの防壁が、かつてこのちかくをとおっていたという説明がかかれている。

ゴンボさんに紹介してもらった郡長のドルジバータルさんは地元の出身でユンシューブ姓だという。モンゴル国立大学の歴史・アーカイブズ学科を1990年に卒業している。卒業アルバムをみせてくれたが、まんなかにうつっている担任の先生はわたしの留学時代からの友人チョローンバータルだったので、親近感をおぼえた。郡長はいま2期めで、人民党の推薦をえられれば、秋の選挙で3選をねらうという。郡の人口は約1,500人でその4分の1がバルガ系の住民だそうだ。

マンライバータル・ダムディンスレン像

ひだりから郡長、ツェンディーナ、オヨーンバータル、ガンドルゴル、オトゴンバータル、筆者

郡長にいちばんききたかったのは、バルガ人が最初にマンライバータル・ダムディンスレンにあたえられた領地から、いついまの郡のある地域にうつってきたのかということだ。ドルジバータルさんによれば、移動は1941年だという。となると、ハルハ河戦争のあと、将来予想される日本軍との戦闘にそなえたソ連軍の陣地構築との関連で国境ちかくの地域から移動させられた、という解釈がなりたつ。もっとも、ゴルバンザガル郡やドルノド県のホームページをみると、ゴルバンザガル郡という名称は1927年につけられ、1942年にオチルバヤンムンフ郡の6バグ（行政単位）とゴルバンザガル郡の4バグが合併したということなので[11]、移動は1942年かもしれない。

郡長に案内され、ゴルバンザガル郡の資料館を見学した。資料館のまえにはマンライバータル・ダムディンスレン像がそびえている（写真参照）。同資料館にはマンライバータル関係のものを中心に同郡を紹介する資料が展示されている。

簡単な昼食のあと、ちかくのオソリーン・ガンドルゴル（Osoriin Gandolgor）というおばあさんのゲルを訪問した。むすこのラースレンギーン・オヨーンバータル（Lhaasürengiin Oyuunbaatar）さん（53歳）もまじえてはなしをきいた。ガンドルゴルさんの母親はマンライバータル・ダムディンスレンの旗に属したシャライド姓のバルガ人で、1913年にモンゴルにうつってきてハルハのひとと結婚した。母親の一族のまつるオボーは新バルガ右旗の中心地アルタンエメールにあったという。1940年うまれのガンドルゴルさんは、バザルラグチャーギーン・ラースレン（Bazarragchaagiin Lhaasüren）というバルガ人と結婚した。ラー

[11] http://gurvanzagal.dornod.khural.mn/n/kh1on（2015年5月27日）, http://www.dornod.net/i/22008（2015年8月1日）.

スレンは鑲白旗のひとで、1945年にシャーリーボーさんたちのグループにすこしおくれてモンゴルに移住した。バザルラグチャーは1924年うまれで、満洲国の軍隊に動員されたが、ノモンハン戦争には参加していない。1944年にマンジョウリ（満洲里）でとったバザルラグチャーの写真が大切に保管されている（写真参照）。オヨーンバータル氏によると、親戚が中国のフルンボイル市にもモンゴルのフルンボイル郡にもかなりいるという。中国にいる親類との交流が可能になったのはモンゴルの民主化後の1992年からだそうだ。中国の文化大革命のときにも少数のバルガ人が国境をこえてきたが、スパイの嫌疑をうけ、移動が制限され、ボルガン県に居住した例があるという。

バルガ人とハルハ人の関係は微妙で、ナーダムのとき、集団のけんかがおこったこともあるそうだ。

うえでものべたが、旧ダムディンスレン旗の領域は、いまのゴルバンザガル郡とはかさならない。したがって、こまかくいえば、マンライバータル・ダムディンスレン像がゴルバンザガル郡にたてられているのは不自然な気もする。中国軍に逮捕され1921年に獄中でなくなったダムディンスレンの遺体は現チョローンホロート郡のシネボラグにほうむられたこと、そこに最近記念碑がたてられたことは、ミャグマルサンボーさんの本からしった[12]。今回の調査では、シネボラグにあるという記念碑をおとずれるのもひとつの目的だった。通常、広大な草原のなかのひとつの碑にたどりつくのは、容易なことではない。事前に地元のひとから場所についてくわしい情報をえることが不可欠だ。

ゴルバンザガル郡の中心からチョローンホロート郡シネボラグへのみちは、例年だと草のたけがたかく、大量の草がタイヤにからまってタイヤが過熱してしまうので、車でいくのはとても大変だそうだ。ただ、ことしはあめがすくなく草のたけがひくいので、アクセスは問題がないということで、予定どおりシネボラグをめざした。

ゴルバンザガル郡とチョローンホロート郡をへだてるオルズ河は渇水のため、完全にかれていた。しおがしろくふきでた、ちいさい湖の岸辺ちかくにたてられたマンライバータル･ダムディンスレン碑に運よく､まようことなくたどりついた。碑には「人民のためには、いのちをおしまず」ときざまれている（写真参照）。1916年にダムディンスレンにあたえられたホショーは、まさにこの地域にあった。

この日は、ロシアとの国境のまちエレーンツァブに宿泊する予定だったので、北東の方角にすすんだ。チョイバルサンからロシアに通ずる鉄道の駅がある。おもに貨物をはこんでいるが､旅客も利用するので､ちゃんとした宿泊施設があると予想していた。しかし、この予想はみごとにうらぎられた。エレーンツァブはさびれた国境のむらで、まともなホテ

[12] T.G.Myagmarsambuu, 2011, p.51.

中央がバザルラグチャー（1944 年）

マンライバータル・ダムディンスレン碑

ルはなく、食堂すらなかった。民宿は一軒あったが、部屋がふたつしかなく、運転手をいれて4名のわれわれがとまれるようなところではなかった。仕方なく予定を変更して、チョイバルサンにもどることにした。

同行のオトゴンバータル、ツェンディーナのふたりにとっては、エレーンツァブといえば、最近評価のたかい詩人D.ニャムスレン（1947-2002）がくらし、記念碑的な作品をかいた場所なのだそうだ。ふたりがニャムスレンの碑をさがしにいくというので、ついていった。ニャムスレン記念学校（9年制か？）のなかに、たしかに詩人の碑があった（写真参照）。

チョイバルサンにもどるには、鉄道ぞいのみちをいけばいいので、ルートは単純でわかりやすかった。夜の7時にエレーンツァブを出発し、途中、パンにソーセージ、オトゴンバータル氏がもってきたギリシャ産のブランデーで簡単な食事をとり、4時間後の11時にチョ

エレーンツァブ駅ちかく

詩人 D. ニャムスレンの碑

イバルサンにかえりついた。エレーンツァブをでて、すこしいくとひだりがわに湖があらわれる。マンライバータル・ダムディンスレンたちが最初におちついたフフノールである。

翌8月27日（土）は、ヘルレン河の北をとおる旧道ぞいにヘルレン・バルス・ホトをめざした。このみちは、最近は地元のひとしかとおらないという。ふつうはヘルレンのみなみの舗装された新道をとおるからである。わたしたちもチョイバルサンにくるときは、新道できた。途中、白鳥のつどう、うつくしい湖の岸辺によった。ふたつの湖が隣接しているが、そのうちの東がわの湖である。白鳥を16羽かぞえることができた。そのあと、ヘルレン河が湾曲しているところをみおろせる場所でもう一度くるまをとめた。このあたりは、バヤントゥメン郡である。

ヘルレン・バルス・ホトへのみちをききながらすすむ。本来、比較的わかりやすいはずだが、それでも途中で何度かみちをまちがえた。遼代にたてられた仏塔は最近修復され、外観がかなりかわってしまったという（写真参照）。かつては仏塔が2基あったが、ひとつは崩壊してしまった[13]。地元の牧畜民の案内で、仏塔から西に数キロの遺跡にもいってみる。ふたつの主要な遺跡があり、おおきなほうは、なかに方形の遺構がのこる。さらに全体をかこむ城壁のあとらしいものもみえる。

清代にはセツェン・ハン・アイマグという行政区分があり、ヘルレン・バルス・ホト盟ともよばれた。この地に盟の実力者たちが定期的にあつまって会議をおこなったり、清朝の使者と会見したりしたので、このように命名された。ちかくには、ほかにこのようなランドマークがなかったので、集合場所としてえらばれたのであろう。

案内してくれた牧畜民は、トゥブ県のバヤン郡から最近、家畜をつれてこの地へうつってきた。このわかものによると、ブリヤート人は性格がいいのに対し、バルガ人は性格がわるいという。この辺からもバルガ人のおかれた状況が、かいまみられる。やはりこの牧畜民によると、ホジャ―（*khujaa*, 漢人に対する蔑称）が血をすうむしを河にながしたため、家畜がやられることがおおく、最近は家畜を河にはいらせないようにしているという。漢人への悪感情がこのようなうわさのかたちであらわれるのは、決して健全だとはおもわないが、ひとつの現実ではある。

いっしょに旅行しながら、アンナ・ツェンディーナさんから母親、つまりTs.ダムディンスレンの奥さんのはなしをきいた。アンナ（愛称はアーニャ）の母親は漠然とロシア人とおもっていたが、そうではなくリトアニア系の“純粋な”ユダヤ人だという。母親の父親は有名な革命家で殺害された。また母親の一族のほとんどはナチスにころされた。母親は労

[13] ヘルレン・バルス・ホトについては、正司哲朗、A.エンフトル「ヘルレンバルスホト1の仏塔デジタルアーカイブと応用」『日本モンゴル学会紀要』46号（2016年）参照。

ヘルレン・バルス・ホトの仏塔

詩人 R. チョイノムの詩碑

働者のむすめということで、大学に推薦され、そのためにいきながらえた。レニングラード大学では本当はドイツ語を勉強したかったのだけれども、モンゴル・チベット学科に配属されてしまった。本人はモンゴル語に興味がなくやめたかったのだが、「もしあなたがやめると、学科が閉鎖されてしまうので、やめないでほしい」とブルドゥコーワ（著名な西モンゴル研究者ブルドゥコーフのむすめ）に懇願され、しかたなく、のこったのだそうだ。留学してきたわかきダムディンスレンは最初ロシア語があまりしゃべれなかったので、ガールフレンドが必要ということで、アンナの母親と交際するようになったのだという。

アンナ自身は最初、オラーンバータルの音楽学校でピアノを勉強していたが、結局、母親とおなじレニングラード大学のモンゴル・チベット学科を卒業した。社会主義時代は、13年間、モスクワで内モンゴルむけのモンゴル語放送のしごとをした。給料はよく、つかえる時間もおおかったので、世界文学研究所の大学院に在籍し、チュルクの英雄叙事詩の研究で有名なネクリュードフや、高名な中国古典文学研究者のリーフティンら、当代一流の学者の指導をうけ、モンゴルの仏教説話の研究で最初の学位を取得した。

Ts. ダムディンスレンの奥さんは、最初は夫とともにモンゴルで生活し、図書館などに勤務していたが、ダムディンスレンがラーマーヤナのモンゴルへの伝播の研究のためにソ連にいったときに同行し、結局そのままソ連にとどまった。それは交通事故で1年間、入院せざるをえなかったことと関係があるという。

ついでにいえば、オトゴンバータル氏はダムディンスレンの最後の弟子で、最晩年のダムディンスレンの身辺の世話をした。

ヘルレン・バルス・ホトをみたあと、フルンボイル郡のきたでヘルレン河のはしをわたり、新道に合流した。ウンドゥルハーンのブルゲドハン・ホテルにとまった。チョイバルサンのヘルレン・ホテルはいかにも社会主義時代にたてられた、ふるいさびれた感じのたて

ものだったが、ブルゲドハン・ホテルはあたらしく、ずっと快適だった。

8月28日（日）。午前中はヘンティー県の博物館を見学した。ここの博物館はなぜか、日曜日が休館日で、本来ならはいれないのだが、前日の晩、オトゴンバータル氏が知事に電話をして、特別にあけてもらうことにしたそうだ。まずセツェン・ハン王府博物館を見学した。1828年にたてられたセツェン・ハンのやしきを博物館にしたものである。わたしは10年まえにこの地をおとずれたときにも、この王府をみたが、いまのように整備はされてなく、博物館にもなっていなかった。このときの訪問も本誌にかいたことがある[14]。説明員がかなり丁寧に展示品の説明をしてくれた。民具や仏像も展示されている。郷土史博物館がべつにあり、こちらには動植物や鉱物の標本がおかれている。

県知事のツォグバドラフさんに昼食に招待された。ヌーデルチン（遊牧民）というなまえのギョーザ･スープで食事をし、国産のセングール･ビールをのんだ。民主党員の知事で、まもなく人民党員の新知事にひきつぐそうだ。

ヘンティー県のうんだ詩人としては、民主化後に反体制的な詩で脚光をあび、モンゴルの最高賞である国家賞を没後授与されたR.チョイノム（1936-1979）が重要で、公園のなかに詩碑がある（写真参照）。解説によれば、かれの逮捕、投獄の原因になった作品「みずからによみきかせる詩」はこの場所でつくられたのだという。

この日の夕方の6時にオラーンバータルに帰着した。

（付記　本稿は科学研究費補助金による課題「モンゴルにおける境界と越境の歴史」［課題番号15K02887、研究代表者　二木博史］による研究成果の一部である）

[14] 二木博史「ヘンティー紀行―大モンゴル建国800周年記念シンポジウムへの出席」『日本とモンゴル』113号（2006年9月）, p.45.